

クラブニュース

吹奏楽プロ集団の迫力ある演奏が  
第八回AAFCLライブコンサートを開催

去る9月8日(土)、午後時三十分より、新設された「けやきプラザ」ふれあいホールで、吹奏楽のプロ集団「イテラルウィンドアンサンブル」を招いて、第六回AAFCLライブコンサートを開催されました。

コンサートは、第一部は二十三名の編成による吹奏楽演奏。第一部では、第一部の演奏の録音をいくつかのアンプ、スピーカーを用いて再生する形で進められました。

当日は我孫子市内の全中学校の体育行事と重なったため、集客の面で危惧がもたれていましたが、最終的に約二百名の来場者を迎えて、盛会裡に終ることができました。来場者の感想も実に素晴らしい演奏でした。少人数編成ながら、メンバーの高い実力がある繊細さと迫力を生み出していました」と、大変好評を博していました。

第一部でも、大部分の来客はそのまま残り、録音再生を楽しんでいました。何人かの感想でも、「音比べはすごく面白かった」、「ポーカーに適したアンプも素晴らしいが、回路設計した基板につないだアンプがいいと思った」等々、全体として極めて好評であったといえます。

このコンサートが二人でも多くの会員増に繋がるのが強く望まれます。



好評だった吹奏楽演奏

オーディオと私

今回は「さいたま市」から、毎回熱心に例会に出席されている池田充宏さんに登板して頂きました。

(編集室)

▽二年がかりで自作したステレオ  
四十年前の夏のある日曜日、東京大森の独身寮の八畳間で、私は前日購入したばかりのカートリッジを、アーム付属のヘッドシエルに取り付けていた。

シエルをアームに接続し、針圧を調整した。二年がかりで、やっと私のステレオが完成していたLPの電源を入れ、当時十数枚持っていたLPの中から、ベーター・ウェンの「田園」(フルター指揮コロムビア交響楽団)を選び、ターンテーブルに乗せ、カートリッジの針をそと盤の溝に落とす。胸かときめいた。そして、あの冒頭の第二ヴァイオリンの優美な旋律が、部屋に響いた。想像していた音よりも良い音であった。

これからは、この音で好きな時に、好きなだけ音楽を聴くことができると思うと、喜びが込み上げてきた。

その日は、持てるLPを取り替え引替え、食事を忘れて夜遅くまで聴いた。幸せだった。前年に就職して、社会人となった私は、初めての冬の賞与で、ステレオを買おうと思いつき、秋に入ると、雑誌を読み秋葉原通いを始めた。

各店を回り、スピーカーの試聴をした。とにかく弦楽器の音が自然なことが、私のスピーカー選びの基本だった。多くの製品の中から価格面でも私の手が届く、英国のワフエテルを選んだ。中域のしっとりとした、暖かい音が気に入った。アンプはサンズイのレシーバーにした。この二つを買った。冬の賞与では足りなくなってしまう、当時はFM放送で音楽を聴くこととし、プレーヤーは翌年の夏までお預けとなった。

この時が私のオーディオ事始めであった。

▽軸足をハードよりソフトに

私がクラシック音楽を意識的に聴くようになったのは、高校生の時からである。当時は愛読していたロマン・ロランの影響もあって、ベーター・ウェンに傾倒しており、彼の主要曲をむさぼるように聴いていた。名曲に入り、上京して嬉しかったのは、名



ネラホゼヴェス(ドボルザークの出生地)にて

曲喫茶)が多いことだった。下宿生活では、日常大きな音で音楽を聴くには、コンサートに行くか、一曲喫茶に行くしかなかった。

当時よく通った店のうち渋谷谷の「ライオン」のみが現在も営業しており、時々立ち寄るが、そこで二十代の自分に出会えるように懐かしい。

これらの喫茶店に本を片手に行き、二杯のコーヒーで長時間ねばって、薄暗い中で読書をし、音楽を聴いた。ここでベーター・ウェン以外の多くの作曲家の作品を知り、多くの演奏家を知ることができて、聴く音楽もバロック、現代音楽と幅が広がった。又、同じ下宿の友人に、モダンジャズの熱烈なファンがいて、彼に手ほどきを受けたいお陰で、ジャズも聴くようになった。

就職し、転勤族となって、各地を転々とする中で、LPの所有枚数は次第に増えて行ったが、ハード面では、アンプがダイナコのセパレートアンプから、現行のアーキユフェーズのプリメインに、ターンテーブルがソニーのベルトドライブに、カートリッジがオルトフォンに変わり、LPからCDに転向して、クオードのCDプレーヤーに替わったくらいで、あまり進歩がない。このことは、私に経済的、時間的余裕がなかつたことにもよるが、ハードで大切なのは「部屋」であると考えていて、転勤が多い身では良い部屋の確保は望めないこと

とから、ハードは程々にして、ソフト面(LP、CD)の収集とコンサート通いに力を入れるよう決めていた結果である。しかしAAFCLに入会して、会員諸兄のハード面でのたゆまぬ努力を身近に見るにつけ、己の怠惰に内心忸怩たるものがある。

▽オーディオを通じて

実在する音楽的感動

現役の頃、あるパーティで取引先の化学会社の日本支社役員(ドイツ人)と音楽談義をしていた。彼はアマチュアのピオラ奏者でもあり、教養ある人だった。談話またまオーディオに及んだ時、「でもそれは所詮フェイクでしょ」と日本語に堪能な彼は「FAKE」だけ英語で言った。「まがい物」というコリアンズと私は受け取った。「貴方は故人となった名演奏家のCDは聴かないのか」と反論したら、「資料として聴く程度」との返事。

確かに、かつてNHKホールで聴いたホーム指揮ウィーンフィルのシュルベルト「ザグレイト交響曲」の演奏は凄かった。これこそ真実の音楽と思ひ感動した。しかし、私の部屋で聴く、ホーム指揮ベルリンフィルの「ザグレイト」のCDが、私の貧しいオーディオ装置を通して鳴る音にも、私は真実の音楽を感じ感動する。決して「FAKE」とは思わない。感動の質には変わりはない。コンサートで聴く生の音楽だけが音楽ではなく、オーディオが鳴らす音響にも音楽を聴き取り、演奏する人間を感じる事が可能なのだ。この世にオーディオがなかったなら、私はこれだけ多くの作曲家や演奏家を知ることにはなかつたであろう。又、作品についても同様である。

これまでの人生を振り返り、音楽を聴くことができる耳と感性をもてたことを、心から感謝している。音楽は私の人生を豊かにし、彩りを与えてくれた。家で好きな時に好きな曲を聴くことを可能にしてくれたのが、オーディオであった。

最近CDを聴く度に、あと何回この曲を聴けるのだろうかと考えてしまう。

私に残された時間は次第に少なくなってきた。二回を大切にしなければと思っている。

池田充宏